



## 進化するスイス観光

ヨーロッパにあまたある観光地のなかで、私はスイス・アルプスを取り上げる機会が多い。山が好きという個人的理由はさておき、スイス・フラン高にもかかわらず世界の観光客を惹きつける魅力と磨きのかかった観光政策は、それだけ紹介する意義があると思えるからだ。

本誌1月号でインド人観光客の話題に触れたが、この夏アルプス・ユングフラウ地方を旅行した際は東アジア系観光客に圧倒された。地元紙によると韓国、中国、香港、台湾の客が急増し、なかでも韓国人は年間+230%だという。

片や自国民とヨーロッパ系観光客はユーロ安のあおりで減少気味。自国民は強いスイス・フランを有効に使うと国外へ流れ、ヨーロッパ系観光客は逆に二の足を踏む。スイスは西ヨーロッパの中央に位置し便利な交通網が強みだが、当然、自国民が国外へ行くのも簡単だ。

日本人のアルプス熱は一段落したかに思っていたが、それはとんだ誤解だった。ヨーロッパで標高が一番高いユングフラウヨッホ駅（海拔3454m）へ向かう登山列車でのこと。ボックス席の前に座ったのは期せずして若い日本人カップルだった。車内放送はドイツ語、英語に加え、韓国語、中国語、日本語も加わるマルチリンガル。日本語の時はディスプレイに日本アニメ・ハイジの映像が登場する凝りようだ。ハイジがかわいい声で「次はユングフラウヨッホ駅です！」と迎えてくれる。

ここ数年の間に日本人客がずいぶん変わったと思うのは服装・靴・リュックサックといった装備の本格化。観光地を駆け足で回る従来型の旅行ではなく、じっくり宿泊しながらハイキングや登山を楽しむスタイルが人気を博している。アルプスを本当に楽しみたいなら、やはり歩くに限る。偉そうな書き方になるが、日本人も地域のエッセンスを感じる観光ができるようになってきたのが嬉しい。

そういった滞在型観光には自炊できるリーズナブルなペンションが重宝する。結果、食料の買い出しが日課となり、地元スーパーは日本人で込み合うことになる。日本人客が急に増えた時代には行動様式や文化の違いから観光地で摩擦が相次ぎ、「日本人お断り！」という看板が立てられたことさえあったから、隔世の感がある。

ただしアルプスも有名観光地の常として、観光従事者のそっけなさやスレた対応が目立つ。観光客は観光地に素朴さや人のぬくもりを期待するが、これは少々勝手な望みで現実にはなかなか難しい。例えばスーパーのレジにしても、外国人観光客は慣れないスイス・フランの小銭を探し出し出すためどうしても時間がかかる。せつきはしなくとも店員のいらいらした空気は伝わってしまう。『もてなしの心』は世界に通じる観光資源のひとつといえる。

観光客は時代と共に観光スタイルを変え、常に進化し続けている。また客層は世界情勢を反映し、アルプスなら今は新興国、将来はまた別の国々がメインになるはず。観光地そのものの地力に加え、時流に乗っかり適応する柔軟さがアルプス観光地の腰の強さなのだろう。

（在独ジャーナリスト 松田 雅央）



ユングフラウ地方の夏祭り。民族行列の後方にアイガー山（海拔3970m）が見える